



# オアシス

文責：副学長  
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2021年2月23日発行 第34号

2月に入り「立春」を過ぎるといよいよ春の兆しが見え始めます。しかし、「三寒四温」とはよく言ったもので、寒い日、暖かい日を繰り返しながら春に少しずつ近づきます。その変化を肌で感じながら過ごせれば「寒さもまた楽し」というところでしょうか…。

コロナ禍において、本アカデミーでは感染対策をしっかりと行いながら各事業を推進しています。文化芸術の灯を絶やさない取り組みを、今後も知恵を絞りながら邁進いたします。

## ◎ 『夢いっぱい♪春まちコンサート2021』が大盛況！

アウトリーチ事業（音楽と音楽家の出前事業）の集大成として、出雲フィルハーモニー・チェンバーオーケストラ（小編成）によるコンサートが開催されました。小さなお子様にも楽しんでいただけるよう取り組み今回で3回目となります。今年も多彩なプログラム編成で楽しんでいただけたことと思います。曲目と演奏をプログラム順に紹介します。

① オープニングはボディーパーカッションから始まりました。手拍子で身体全体を使うなど、カホンという箱状の楽器も駆使しながらのリズム演奏です。軽快なリズム運びに胸躍る気分でした。

②フレキシブル・アンサンブルというスタイルで演奏された珍しいアンサンブルです。フレキシブルとは「柔軟に」という意味です。今回は、木管・金管・打楽器・コントラバスで編成され「さくらのうた」の演奏です。日本人の心の花木「桜」の満開から散りゆくさまを表現豊かに奏でました。

③出雲フィル・チェンバーオーケストラによるサン=サーンス作曲「動物の謝肉祭」です。この曲は、多くの動物が登場する14曲の小品からなる組曲です。子供向けの作品としても有名で、それぞれの動物には語りが付き、動物の様子を各楽器がユーモラスに表現するところが聴きどころの曲でした。

④チェンバーオーケストラをバックにソプラノ歌手の登場です。モーツァルトが17歳の時に作曲された《モテット》から「アレルヤ」を表情豊かな歌声がホールいっぱいに響き渡りました。

⑤プッチーニの名曲、オペラ《トゥーランドット》から「誰も寝てはならぬ」をテノール歌手の出番です。あまりにも有名すぎる名曲に解説は必要とせず、いつ聴いても心に響く作品であり、会場も感極まる雰囲気になりました。

⑥今年度の特別事業で市内小中学校の校歌を録音しました。その中からアウトリーチでお邪魔した小学校5校の校歌を披露いたしました。会場にも出身校の方が来場されており、懐かしい想いで聴いていただけたのではないのでしょうか。

⑦ヴェルディ作曲のオペラ《椿姫》から「乾杯の歌」をソプラノ歌手二人とテノール歌手が声量豊かに歌いあげ、チェンバーオーケストラと共に会場全体



裏面へ

が最高潮に達し、聴衆の皆様からも温かい拍手が鳴りやみませんでした。

最後は、ミュージカルで有名な《アニー》から「トゥモロー」を会場の皆さんと出演者が一体となりエンディングを飾りました。

演奏会の度に曲目や演奏について、いつも分かりやすく解説していただけるのは、指揮者の中井章徳芸術監督です。今回も小さいお子さんから大人の皆様まで、真の音楽観を楽しんでいただけたことと思います。

音楽の喜びや楽しさは、ともに合わせることにあるように思います。一人一人が学んだ技術を合わせてみることでアンサンブルが成立し、一人では味わえなかったハーモニーやよりダイナミックな表現に、心躍る感情が沸き起こる気がします。このことは、本アカデミー音楽院が目指している合奏・合唱体験を経験することの意義にもつながります。主義・主張の違う者同士が、音楽を通じて一つのものを創造していくという取り組みは、改めて崇高で誇りに思うことしきりです…。



## ◎ オペラ講座 Vol.2 が開催！

前回の Vol.1 は、「それは終わりから始まった」というテーマで、オペラの起源にまつわるお話が中心でした。今回は、「地に堕ちた愛の歌」と題し、作曲家ヴェルディ以降からプッチーニまでの作品を中心に、資料や映像を交えながらお話しいただきました。



ヴェルディの作品は、当時ドイツの作曲家ワーグナーと常に比較されていたことに興味をもちました。ワーグナーは、自身が前面に立ち主張する音楽が多く聴衆を圧倒するのに対し、ヴェルディは控えめで聴く人がどう感じるかに趣をおいていたとか…。そんな両者の聴衆者の評価は、ワーグナーの方が圧倒的に人気があったそうです。しかし、近年はヴェルディの作品が見直され、緻密で完成度が高いオペラ作曲家の第一人者としての地位を確立していく様子を細かく紹介していただきました。また、プッチーニの作品の中でもっとも有名な《トゥーランドット》は、自身最後の作品ですが、曲の最終部分が未完成のまま亡くなったとのこと。現在上演されている作品は、弟子や周囲の関係者がプッチーニの作曲法を予想して完成されたものだと知りました。

上演に際してのエピソードもあり、当時の大指揮者トスカニーニは、プッチーニのオリジナル部分だけを取りあげ、弟子や関係者が創りあげた最終部分になると突然演奏を取りやめたというのです。プッチーニが実際に創りあげた部分のみの作品と最終部分が付け加わった作品との対比にとっても興味津々でした。このことは、マスカーニ作曲《カヴァレリア・ルスティカーナ》に相通するものがあります。本人が描きたかった光景が、当時の歌手や演奏上の都合で編曲された経緯と重なり、3月7日「出雲の春音楽祭2021」でオリジナル稿が世界初演として上演されることに、ますます興味がわいてくるようです。

今回、平野一郎氏による連続オペラ講座を拝聴し、私自身が理解できることがあまりにも少なく勉強不足に恥じ入るところですが、平野氏の次のメッセージに救われた思いです。

『音楽はワカルのではなくカンシルもの。理屈っぽい常識から感性を解き放ち、音のココロ＝本質にふれること。ひとたび耳と心が開けば、深く愉しくかけがえのない、タマシイあそび魔法の世界が広がります。』

【このたよりは、本アカデミーホームページでも掲載します <https://www.izumo-zaidan.jp/academy/>】